



NPO法人アジール舎の10周年を祝う式典であいさつする亀口会長
(宇治市榎島町大幡「ころぼっくる家」)

子どもの居場所、支えて10年

宇治市榎島

アジール舎「ころぼっくるの家」

児童デイの関係者ら集い

子どもの発達支援などに取り組んでいるNPO法人(特定非営利活動法人)アジール舎「ころぼっくるの家」(宇治市榎島町大幡、亀口公一会長)の開設10周年を祝う式典が5日に開かれ、子どもの居場所づくりを支えてきたアジール舎の足跡を振り返り、新たな一歩を踏み出した。

アジール舎は「児童デイサービスの活動を開始した。」「アジール」はドイツ語・フランス語で中世の自由都市の意味。日本で言えば駆け込み寺とも称すべき自由な空間を指向して命名。「ころぼっくる」はアイヌの言葉で「子ども」の妖精」の意。地域の子どもたちみんなに愛される自由な居場所にしたいとの思いを込めた。

活動では児童デイのメニューを見直し、発達支援(幼児対象)、放課後等デイサービス(小学生、中学生対象)、子ども訪問(ころぼっくる)の3事業に再編。対象児の年齢幅を広げ、子どもたちがより利用しやすい活動空間づくりに努めている。

一昨年から障害の有無に関わらず特別な支援を必要とする0歳～18歳の子どもを対象に発達相談

支援を行う相談支援室「ぴりか」を開所。心理士など専門員を配置して様々な困難を抱える子どもの育ちの支援に向けたサービス利用計画を無料で策定し、発達相談の分野でのケアマネージャー的な活動をを通して、切れ目のない親子支援をめざしている。

また昨年8月から「ころぼっくるの家」に隣接する民家に子どもフリースペース「すぶりんぐ」を開館。

▽創る(創る楽しみをみんなで見つける)▽学ぶ(学習活動)▽相談する(悩みや望みを相談する)――の3つを軸に榎島地域を中心に不登校やひきこもり、学習や友人関係の悩みのある小学生、高校生を対象に火曜、金曜(10時～17時)まで開館している。

「ころぼっくるの家」での集いには約50人が参加した。亀口さんは子どもの居場所づくりの活動を振り返り、「これまで自然の中にも居場所が一杯あったが今は大人たち自身が環境を作って提供していかなければならない。その思いがこの建物に結びついた」と述べ、後援会長として奔走した辻忠夫さんら関係者に改めてお礼。「これからも若い人たちが一緒に地域を耕していきたい」と抱負を述べた。

参加者からは「子どもにとっても家族にとっても心の糧となる大切な場所」「これからもずっと心の支えになってほしい」などの声が上がった。【岡本幸一】